◉共通教材ノート

シューベルト作曲

「魔王」……渡邊學而

シューベルトの歌曲《魔王》D328の履歴書

〔作曲年代と稿〕

1815年10月に作曲されたというのが、現在のところもっとも確からしい年代である。これは友人たちの回想録とか、シューベルトの楽譜をよく筆写していた友人のアルベルト・シュタトラーが1815年にはすでにこの曲の筆写譜を書いていることなどから推測されたもので、まだ確定的ではない。

シューベルトは、この《魔王》を三回書き変えているから全部で四つの稿がある。そのうち、第1稿と第4稿の自筆譜は失われているが、第2稿は現在ベルリンの国立図書館に，また第3稿はニューヨークのピアポント・モーガン図書館に所蔵されている。なお、現在一般に歌われているのは、第4稿である。

〔ゲーテの評価〕

1816年4月に、友人のヨーゼフ・シュパウンが丁寧な手紙を付けてシューベルトのゲーテの詩による歌曲を、ワイマールのゲーテのもとに送っている。その中には《魔王》をはじめ、《羊飼の嘆きの歌》、《野ばら》、《馭者クロノスに》などが含まれていた。しかしゲーテはなんの反応も示さず、作品だけがそのまま送り返されてきた。また当時のゲーテの日記にも、シューベルトの名前はどこにも書かれていない。

ところが、ゲーテはシューベルトの死後、1830年4月24日にウィルヘルミーネ・シュレーダー＝ドゥブリアンの歌う《魔王》を聴いている。その時ゲーテは「わたしはこの作品を以前一度聴いたことがあったが、その時にはまったく感動しなかった。しかしこのように歌われると、全体の姿が眼で見る絵のようにはっきりと浮んでくる。」といっている。

〔公開演奏〕

《魔王》は作曲後シューベルトの私的なサークルではかなり演奏されていたが、公開演奏会の場で初めて歌われたのは、1821年1月25日であった。それはその前年の12月1日に、宮廷の書記で立派なテノール歌手でもあったアウグスト・フォン・ギュームニヒがゾンライトナー家の私的な演奏会でこの曲を歌い、大喝采を博した。このギュームニヒは、ウィーン楽友協会の代表もつとめていたために、その約2ヶ月後にウィーンの楽友協会のホールで公開演奏をすることになったの

である。この時のピアノは、四人姉妹で有名なフレーリヒ家の長女で、当時音楽学校の声楽の先生をしていたマリア・アンナ・フレーリヒであった。

第2回目の公開演奏会は、同年3月7日に音楽アカデミーの大ホールで、こんどはミハエル・フォーグルの歌、アンゼルム・ヒュッテンブレンナーのピアノで行なわれた。フォーグルは以前からシューベルトの歌曲を歌って広めてくれた元宮廷歌手、ヒュッテンブレンナーはシューベルトの友人の一人である。

〔出版〕

1817年3月の終わりごろ、友人たちが何とか《魔王》を出版しようと考えて、ライプツィヒのブライトコプフ・ウント・ヘルテル社に手紙を添えてこの曲の楽譜を送っている。ところが出版社は、ドレスデンにいた同名の作曲家フランツ・シューベルトにそのことを問い合わせたために、4月18日付でドレスデンのシューベルトから「わたしはこのようなカンタータを作曲した覚えはないし、誰がわたしの名前を勝手に使ったのか、調べる必要がある」旨の手紙を受取っている。このドレスデンのシューベルト(1768〜1827)は、当時ザクセン宮廷のコントラバス奏者で、宮廷教会作曲家であったから、少なくともウィーンのシューベルトよりも有名であった。

その後1821年になってから、ふたたび友人たちが彼の歌曲の出版を計画し、以前のブライトコプフ・ウント・ヘルテル社やウィーンのシュタイナー社と交渉したが断わられてしまった。そこで友人たちが資金を集めて、なかば自費出版という形でウィーンのカッピ・ウント・ディアベリ社から出版することになった。

その最初の作品が《魔王》であった。これは3月31日に作品1として出版され、宮廷音楽長官モーリツ・フォン・ディートリヒシュタイン伯爵に献呈された。この出版は、4月2日付の「ウィーン新聞」に発表され、価格はウィーン通価で一部2フローリン(約2,000円)であった。当時音楽会の入場料が3〜5フローリンであったから、そのころの印刷に要する手間などを考えるとかなり安い値段だったといってよかろう。また最初100部を印刷したがたちまち予約で売切れになってしまったために、全部で3版、約600部が作られたと記録されている。

〔音楽評論家〕